

## ピースサインという自意識 ——「写る文化」の変曲点の史的検討——

### 1 写真における「写ること」

#### ◇ 「撮ること」と「見ること」との歴史的な距離感

- ・ 動画メディアとの違い

《リュミエール兄弟が 1895 年末に、彼らが発明したシネマトグラフという機械を宣伝するために開催した上映会は、自分たちが予想もしなかった反響を人びとに巻き起こし、映画の歴史に新しいパラダイムを切り開いた。それは簡単にいえば、「撮る」文化のパラダイムから「見る」文化のパラダイムへの変化である。[...] 言い換えれば「撮影」を中心とした製作者の文化から「観賞」を中心とした消費者の文化への変容が起きたのだ。》(長谷 2016: 29)

- ・ 一方、写真においては、撮影機材の普及が相対的に早く、広く進む
- ・ 結果的に、写真においては、「撮ること」と「見ること」との断絶が歴史として対象化されにくい

#### ◇ 「自撮り」の初期条件化

- ・ プリクラ、ケータイ、スマホといったインカメラの系譜に焦点が当たることで、「撮ること」と「見ること」の渾然一体とした印象がさらに強化される

《数年前に友人と「固定電話」「リアル店舗」そして「フィルム写真」などのレトロニムの一つとしてそのうち「他撮り」が登場するのではないかと冗談で話したことがあるのだが、その通りになったようだ。検索すると「他撮り」という言葉がふつうに使われているのがわかる。》(大山 2020: 64)

#### ◇ 「写るだけ」という可能性

- ・ とは言え、歴史的にみれば、自らは撮影しない「他撮り」とでもいうべきかたちで写真に接する機会も少なからず存在する。
- ・ にもかかわらず、例えば商品としての写真、「他人が撮影した自己の写真を商品とし

て購入する」という商業写真・営業写真については、カルト＝ド＝ヴィジットのような初期の肖像写真の例を除けば、注目されにくい。

- ・ さらに言えば、自ら被写体となりながら、主導的には撮影に関与しないばかりか、現像された写真に対しても「観賞」と形容できるような接し方をしない、写真との関係性さえ原理的にはありうる。隠し撮り的なスナップ写真のように、知らず知らずのうちに撮影されているという例ばかりでなく、被写体たることを陰に陽に意識して写真に「収まる」という機会。

《写真の対象としてはやはりニンゲンが面白いので、地方都市の街角や海山川などで味わいのあるいい顔をしたヒトに出会うと、ひと言断って撮らせてもらう。

地方の老人などは申し出るとまず身づくろいをして居ずまいを正し、撮り終ると「ありがとうございます」などと丁寧にお礼を言われてしまったりするので撮る方は少々アセル。》(椎名 1994: 4)

#### ◇ 渾然一体なものとして捉えがちな3つの志向性の懸隔を手探りする

《私は写真が三つの実践（三つの感動、三つの志向）の対象となりうることに注目した。すなわち、撮ること、撮られること、眺めることである。》(Barthes 1980=1997: 16)

- ・ 「ポーズをとる posing」という写真実践の一例として、ピースサインを検討

## 2 ポーズと自意識

### ◇ 「自然なポーズ」という課題

- ・ 写真館における被写体たる心得

《鏡面に対する前に姿見鏡に向ひて顔の穢れ衣服の塵埃又は恰好等に注意し我が写さんと欲する位置を能く定め技師に謀りて（半身、全身、真向き、横向き等のこと）徐々に鏡面に向かふべし。鏡面に対してより動作及び位置を変ふるは悪し。すべて手荒き行ひを慎むべし。よく技師の意に随ひて和順を専らとし、身体の動かぬように注意し、着眼及び顔の方向等は技師の指図を待つべし。着眼してより転瞬は妨げなけれど、目球の左右に動かぬやうにすべし。亦口は結ぶ方宜し。》(松崎 1886 = 2017: 275)

- ・ 鍵語として「自然」の出現←新聞・雑誌における「映り方」講義

《写真の上手な写され方は、まづ第一にかたくなならないこと、心をゆつたりと落つけることにございます。心が落ち着いてゐれば自然に態度も軟かになつてきますが、これが、さてこれから写真を撮るんだとか、きれいにとれるやうになど考へてみるとどうしても改まつた態度になつてしまひます。

とりつくろはない態度、邪心のない気分の時一番自然なよい出来映えになります。》

(水谷 1930: 212)

- ・ キャンディド・フォトグラフィーの勃興、鶴見良行のいう家族アルバムの変化(歴史主義的発想の時代から芸術主義的発想の時代へ)との同時代性
- ・ ただし「写る文化」からすると、「様式性対リアリズム」という二項対立の端境に、「意識しない態で写真に収まる」という微妙な境位が成立する余地。
- ・ ジェンダー差:被写体としての心得が説かれる対象は女性が主。

#### ◇ 「手の扱い」という問題系

《手足を空処に置くべからず。何ほど注意しても憑る処なければ動く者なり。近年流行の速写にても成るべく沈止するかたを好しとす。又写し場にて烟草を喫むべからず。》(松崎 1886 = 2017: 275-274)

《手も又おき所に一寸困るものでございます。何かもつてゐる場合でも、何もそのまゝ組んでゐる時でも、絶対に手には力を入れず、軟らかく自然に置くことです。

指はばらばらにせずなるべく揃へてレンズには、転向を横向きや真面に置かずに縦斜位の向きにあたる様にするとしなやかにほつそりした手に見えます。

平常でもこの心がけでゐますと、柔らかな表情が出てきます。》(水谷 1930:213)

- ・ いかなる姿態をとつても「挙措」として解されやすい要素としての手指。
- ・ 後年、ピースサインが一般化して以降、「手指のあしらい方」との理解を準備。

#### ◇ ピースサインと「自然」との折り合いの悪さ

- ・ ろくろ回し(2012)との異同:「サイン」か「ポーズ」か

《子供は“ポーズして”といえ、すぐに V サインをして単調になりがち。でもこれもコツがある。「ただ“撮るよー”だといつも同じポーズや顔になりがちです。たとえば 5 人それぞれポーズが違う「ボウケンジャー(『轟轟戦隊ボウケンジャー』テレビ朝日系)

の好きなポーズしてみてください”などいってみましょう。」(女性セブン 2007)

- ・ 「型撮り写真／スナップ写真」の二元論のいずれにとっても収まりの悪い存在。

### 3 Vサインの指示性

#### ◇ 「V字運動」の一端としての出自

《「ヴィクトリーのV」と題された社会心理学者E・A・シャラーのその論文によると、ドイツ軍占領下のベルギーで、ヴィクトル・ド・ラヴレーという名の弁護士が、同胞たちが壁にRAF(英国空軍)と落書きして、優勢なナチス・ドイツへの抵抗を表明しているのをみて、一九四一年一月十四日のベルギー向けBBC放送で、もっと単純でわかりやすいVの字を符号につかうことを提案した。》(野村 1996: 158)

《英国当局はそれがプロパガンダの手段としてつかえるとみとめ、早速BBC放送などを通じてVサインをくりかえし宣伝し、ナチスに対する地下抵抗運動を鼓舞するのに利用した。二本指をひろげて立ててVの字をあらわし、あいさつにつかたり、〈・・・〉とテーブルをたたいて、モールス信号で伝えたり、ベートーヴェンの第五交響曲の出だしを口ずさんだりしようという呼びかけだった。視聴覚をさまざまに駆使したVサインがあったのである。》(同 158-159)

- ・ 日本においても、「V字運動」の存在は早期に認知、「Vサイン」についてはその後か

《この奇妙な信号“V”字運動の“V”はいふまでもなくヴィクトリー(勝利)のイニシャルで今次大戦の真最中にスロヴァキアの一隅から忽然として発生し、みるみるうちに全欧に広がった勝利の合言葉だが神秘的な価値をもつこの謎の“V”字運動は去る廿日夜ロンドンBBC放送局から謎の人物ブリトン大佐が“V”字運動を放送したのをきづかけにパツと火のついたやうにアメリカ、極東へと飛び火し“V”のモールス電信符号「トン・トン・トン・ツー…」の符合は勝利の合言葉となつてなにかといへばこの“V信号”がものをいふやうになつたのだ。アメリカ青年の口笛も「トン・トン・トン・ツー」の“V”拍子、食事の注文もテーブルを“V”信号でたたくといふありさま》(読売新聞 1941.7.25 夕刊 2面)

《チャーチルがモスクワで飛行機から降りた際、右手をあげ指を二本つきだしたといふユーモラスな話もある […] その夜クレムリンでの宴会の席上チャーチルはその突き出した指二本の形は例のV字運動、ビクトリアの頭文字だと説明したという情報 […]》(読売新聞 1942.8.22 夕刊 2面)

- ・ 敗戦後も指示行為という認識が一定程度成立していた可能性

《一方、日本人はといえば、Vサインが連合国側の勝利を示すマークであるという認識は、戦後のある時期から持っていたようだ。私が小学生の時(何度もいうが昭和30年代のことだ。)、テレビで流されていた古いニュース映画の中に、イギリスのチャーチル首相がVサインをしている場面があった。私が父に対し、「あの人はなにをやっているの」と尋ねたところ、父が「あれは、Vサインとって、アメリカやイギリスが戦争に勝つぞという意気込みを表すときのかっこうだ」と教えてくれたことを覚えている。教養人でもなんでもない、単なる街のオヤジにすぎなかった私の父が、一応、まがりなりにもVサインの意味を知っていたということは、当時の平均的日本人は、これを知っていたということになる。にもかかわらず、当時の日本人は、写真に撮られるとき、Vサインなどしなかった。写真とVサインが結びつくのは、もっと後のことなのである。》  
(小心山荘主人 2000: 96)

#### ◇ 政治文化としてのVサイン／ピースサイン

- ・ 「勝利」「抵抗」の指示性…選挙、社会運動から、競技まで

1960～70年代における米大統領選：ロバート・ケネディとリチャード・ニクソン

1960年代の米国反戦運動のポスター

- 日本での受容状況…60～70年代にかけては、なお、一定の説明が必要な状況

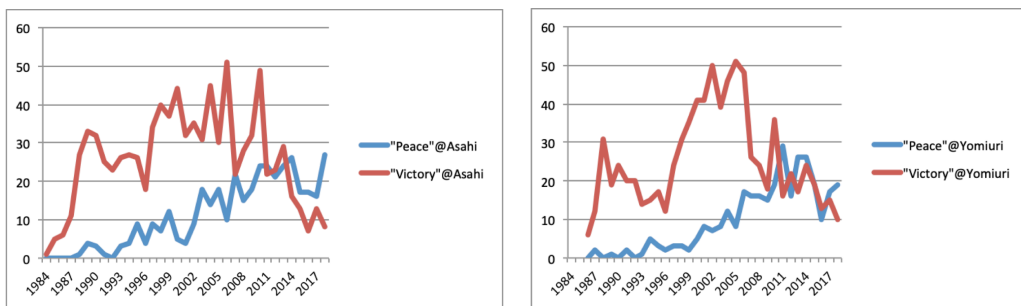
《佐藤首相は十二日、参院選遊説のため、就任後はじめて大阪入りした。[...] このあと二人の候補を出している兵庫県では、チャーチルのVサインばりに中指と人差し指を突き出し「二人をビクトリー（勝利）させて下さい」とゼスチュアたっぷりに呼びかけていた。》（読売新聞 1965 朝刊 2 面）

《宮城県議選告示のけさ、届け出順予備決定の抽選でなんとも気の早いVサイン（仙台レジャーセンター）》（読売新聞 1971.3.30 夕刊 3 面）

《反戦放送の内容は次第に充実していきました。その点では、アメリカ人活動家のヤン・イクスの登場が意味深い。ヤン・イクスは、徴兵を拒否して国外に逃れた活動家でした。この人はあらゆることを教えてくれました。アメリカ兵に人参を食わせるんだったら、縦に長く切るんだということから始まって、二本の指でつくるのがピースサインだ、これによって平和を望んでいるということを伝えられるんだ、握り拳を突き出せば黒人に対して連帯していることを示せるんだとか、です。最初は何もわからなかった私たちに全部、彼が教えてくれました。》（和田 2016）

#### 4 Vサイン/ピースサインをめぐる日本での回顧的視線の成立

##### ◇ 新聞紙面における「Vサイン」「ピースサイン」の出現状況



朝日・読売両紙で全文記事検索可能な時期に限定して検索

- 「Vサイン」が時期的に先行、「ピースサイン」がそれを追う傾向
- 政治運動や政変関連の記事、スポーツ関連の記事の割合が高い
- 「平時の写真」の記述として使われる機会が徐々に出現

##### ◇ クリシェとしての起源探し

猪瀬直樹, 1989, 「日本型“Vサイン”の変質について——ニュース記号論＝「通俗」の

構造 (第 3 回) 中国学生決死のパフォーマンスと日本の泰平」『SAPIO』(3).

《…『サインはV』…『巨人の星』…チャーチルのVサインが、時代を越えてヴェトナム反戦の若者の手に移り、日本では“根性で頑張るゾ”という合図に転化したのである。》

《反戦でも根性でもいちおう意味があった。その意味が消滅していく気配を僕はドリフターズの『八時だよ！全員集合』のなかに感じていた。…マット運動のコーチをしながら女性タレントに前転や後転をさせる。うまくいくと彼女たちは立ち上がってVサインやガッツポーズを示すのだった。70年代の前半である。》(39)

野村雅一, 1996, 「ピースサインの図像学」『身ぶりとしぐさの人類学——身体がしめす社会の記憶』中央公論社

小心山荘主人, 2000, 「いつでもどこでも V サイン ネゴトもコゴトもシゴトのうち連載 16」『警察公論』55(11).

堀井憲一郎, 2004, 「V サインの世界史」『週刊文春』46 (8)

堀井憲一郎, 2004, 「V サインの伝来は何年なのか」『週刊文春』46 (9)

本橋信宏, 2007, 「栄枯盛衰ストーリー——ニッポン欲望列島第 18 回」『創』37 (3).

加藤恭子, 2009, 「ピースサインっていつごろからあるの？ あなたに代わって見聞帖」『ダカーポ』25 (22).

- ・ 「posing という実践における世代差の確認」→「第二次大戦時の V サインへの言及」→「60～70 年代の米国反戦運動とピースサインへの言及」→「日本におけるポップ・カルチャーの影響の示唆」→「サイン性の希薄な posing への漠然とした距離感の表明」
- ・ 「コドモ」の**前景化**…非政治性とメディアの影響の結節点

『巨人の星』『アタック No.1』『コニカ』…

## 5 V サイン/ピースサインにおける「写ること」の快樂

### ◇ 批判の対象としての「写り込み photobomb」

《夕方六時のテレビニュースに尼崎市で起きたスーパー火災の現場中継があった。

リポートする記者の説明にかぶせて映し出された猛烈な煙は、とても中に居たら助かるまいと思わせるすさまじさだったが、やはり犠牲になった十五人は全員窒息死だ

と云う。記者も改めて煙の恐ろしさを訴えていたが、その画面に、にやにや笑う若者たちが見え隠れしながら V サインを出す姿も映し出された。見ているこちらに不快感が走った時、中継を引きとったキャスターが「うしろに居る彼等を何とかして下さい」と怒気を含んだ声で云い切った。》(久能 1990: 90)

《容疑者の少年が逮捕されてすぐのニュースが須磨警察署の前から送られてきたとき、テレビの画面にいっぱい映っていたピースサインの少年たち。あれは何なのだ。いや、少年たちは何なのだと腹を立てるのは当たり前だ。けど、なぜあの場ですぐに、そこにいる大人が怒らなかったのか。》(石坂 1997: 126)

- ・ 生中継: 被写体となることによって視聴者たりえぬこと…「出演」の感覚
- ・ 毀損されるもの

《どんなに大切な内容のニュースを流したとしても、あの光景ひとつでもうチャラだ。あの「絵」を見た他の少年たちは、きっとまたテレビというものをなめてかかるだろうなア。》(石坂 1997: 126)

《しつこく書くが本当にとにかく V サインなのだ。それではなんともワンパターンの写真になってしまうので「V サインはやめようね」などと注文しなければならない。》(椎名 1994: 4)

## ◇ 若者における posing の経験機会

- ・ 暴走族と写真集

《彼らにとっては、『暴走列島』や「第三書館」は、暴走族に関する出版物・出版社の代名詞のようなものにすらなっていたのである。また、彼らのあいだでは、「撮影会」という言葉はただそれだけで「どこかの出版社による暴走族をとり扱った本に掲載する写真を撮るための撮影会」を意味していた。》(佐藤 1984: 231)

《ドラマⅡにおける主役である暴走族のイメージに含まれる「ヒーロー」像が本質的に擬似イベントであり、矛盾に満ちたものであること、また、その矛盾がドラマⅡにおける脚本家—演者—観客関係のあり方に根ざしていることは、硬派という自己主張だけでなく、「写真集」「カタログ」「手記」に掲載される写真にも顕れている。まず第一に、写真に写りたがることは、それだけで、本来自己宣伝しないはずの英雄としては失格である。暴走族の写真集などに特徴的かつ類型的にみられるいくつかのポーズと表情は、この基本的な矛盾を何とか解決しようとする試みとして考えることができる。》



次頁以下の図 7 に示したのは、これらのうちの典型的なポーズである。》(同: 239)

《写真を撮られることを素直に喜び、はしゃいでいることをあからさまに示すピースサインや笑顔は、その対極にある。矜持する硬派は本来写真撮影を拒否するはずであるから、凝固したようなポーズと無表情、あるいは威嚇的な表情をすることによって、くどくどしいコミュニケーションを拒否する硬派というイメージをカメラレンズの前で演出しなければならない。しかし、カメラに向けてポーズをとっている、という基本的な事実は動かしようがない。》(同:244)

- ・ 70～80 年代の時点で、若者のあいだに、被写体たることを意識して posing する機会が存在したこと。
- ・ ピースサイン(Vサイン)とより攻撃的なポーズとのあいだには、「被写体たること」にめぐる自意識の水準に落差があり、かつその点を参与観察者も特段の説明なしに看取しえていること。

#### ◇ 学校文化と営業写真との連関性の等閑視

- ・ 写真館の営業形態の変容

《幼稚園から高校までの学校についてみると、写真館が重要な役割を有しており、日常の営業活動等を通じて学校と地元写真館との関係が緊密になっている。》(田中 1991: 67)

《キャンディドカメラによる機動性のあるスナップ写真を有効に取り入れ、静的な表現からダイナミックな動的表現のアルバムづくりへの脱皮を試みることである。アルバムの動向も、コロタイプー辺倒からオフセットカラー時代へと変貌していますからこの流れを把えたなら、大型カメラによる機動性零(ゼロ)の内容から小型カメラによる速写の可能性を生かし、決定的瞬間をアルバムに再現する、そこからは自由なドラマの演出が容易に生まれて来るといえます。》(吉成 1976: 85)

(堀田 1995)

- ・ 写真を販売・購入する機会
- ・ 型撮りとスナップのあいだ: 撮影を意識させつつ、「自然に」

## ◇ ピースサインの反復性の自覚——写真投稿雑誌『アウトフォト』より

《「アウトフォト」とは「新投稿系読者参加型雑誌」と銘打たれた、一見すると特異な写真雑誌である。この聞き慣れない奇妙な名称“アウトフォト”とは、「out of photographers」の略称)であり、文字通りプロの写真家ではなく素人、つまりごく一般の人びとによる日常写真の投稿によって成立していた。日常写真ブームといわれた流行現象の只中 1997 年 5 月に創刊されたが、2000 年 5 月の 13 号にて休刊した。》(角田 2003: 10)

- ・ 「日本の心 V サイン」や「集合!!! 集合写真」といった投稿コーナーが存在

《自分でもいつ撮ったかわからないほど、日本人の深層心理深く忍びこんだあれ、いつのまに的国民ポーズ V サイン。やってる人の有名、無名問いません。様々な所で繰り上げられる V サイン姿を広く募集します。》(同誌 2 号)

《アルバムの中、あらためてその数を数えてみるっ。  
自分でも気づかないうちにポーズしてた V サインの数に驚かされるはずだ。  
どうしてなんだろう?なぜだろう?ちょっと考えてみると不思議かも。》(同誌 3 号)

《気づくといつのかアルバムの中にまぎれこんでいる V サイン写真。  
誰が最初にやりだしたのか?なんて考えると、眠れなくなっちゃったりして。》(同誌 6 号)

- ・ 起源への遡行は真剣にはめざされず、「気がつくと、無意識のうちに〈自然に〉posing してしまうこと」が延々と確認されていく

《このコーナーを始めて約 2 年の月日がたちました。  
なのに、一向にこれに変わる価値をもつほどのポーズが登場しません。  
egg ポーズどっかに消えちゃったりしたもんね。》(同誌 10 号)

- ・ 部族内のゲームとの異同

(同誌 7 号より)

《「写真を撮るよお〜!!」と言うと、必ずピースサインをしてくれます。／なんか、おおっ…撮られる気満々だな…と、嬉しくなってしまう》(同誌 9 号、読者コメント)

《ついついしてしまう V サインが私は大嫌い!!》(同誌 10 号、読者コメント)

《写真を撮ることが好きな私の周りには、撮られるのが嫌いな人ばかり。》(同誌 10 号、

読者コメント)

- ・ 強迫性・防禦性への言及を稀に含みながらも、「作為と自然」「撮ることと写ること」の緊張関係を瞬間的に馴致する身体技法を共有していることを愛でる心性も存在。
- ・ ロールモデルの存在する「ごっこ遊び」との異同。

◇ 「写る人」もまた「アマチュア写真家」に含まれるべきか

《そもそも手による介入が制作過程で重大な要素となる絵画とは違い、写真技術では、機械的な自動的プロセスが、機器の選択から操作をへて写真の制作に至るまでの全行程を支配している。》(前川 2008: 19)

《だがそもそも、この自動的なプロセスは、数多くの写真論で述べられているように写真の本質的部分を構成しているということもできる。機械的プログラムに従属した主体としての写真家、写真という反復的プログラムに取り付かれた写真家、アマチュア写真家は写真論の核となるはずである。》(同: 19-20)

《写真の反復的なプログラムにだれもが駆動させられ、そのあげくに型通りの境界を越えてしまう。》(同: 28)

- ・ ヴァナキュラー写真のテーマの一つとしてのピースサイン

【引用文献】

Barthes, Roland., 1980, *La chambre claire : note sur la photographie*, Gallimard,

Seuil., = 1997, 花輪光訳『明るい部屋——写真についての覚書』みすず書房.

長谷正人, 2016, 「映画というテクノロジー」長谷正人編著『映像文化の社会学』有斐閣.

堀田義夫, 1995, 『学校写真の上手な撮り方』学事出版株式会社.

石坂啓, 1997, 「ピースサインの子供を叱れ! 石坂啓のまにあってます! 連載 14」『週刊読売』56 (30) .

女性セブン, 2007, 「行楽地で使える! 女性カメラマンに聞いたお母さんのためのデジカメ講座」『』45(17).

角田隆一, 2009, 「<思い出>を消費する若者たち——ある写真雑誌における投稿者の手紙分析から」『現代風俗研究会』(9).

久能靖, 1990, 「許さぬ V サイン——立腹・抱腹」『週刊文春』32 (16) .

- 松崎晋二, 1886, 「写真必用写客の心得」鶴淵初蔵出版(東京都写真美術館, 2017, 『知られざる日本写真開拓史』山川出版社.)
- 水谷八重子, 1930, 「写真の上手なうつつされ方」『婦人倶楽部』11(11).
- 野村雅一, 1996, 「ピースサインの凶像学」『身ぶりとしぐさの人類学——身体がしめす社会の記憶』中央公論社
- 大泉市民の集い写真記録制作委員会, 2010, 『市民がベトナム戦争と闘った: 東京大泉・埼玉朝霞 1968-1975: 写真記録』梨の木舎.
- 大山顕, 2020, 『新写真論——スマホと顔』株式会社ゲンロン.
- 佐藤郁哉, 1984, 『暴走族のエスノグラフィー——モードの叛乱と文化の呪縛』新曜社.
- 椎名誠, 1994, 「サインはいつまでも V」『週刊金曜日』2 (47) .
- 小心山荘主人, 2000, 「いつでもどこでも V サイン ネゴトもコゴトもシゴトのうち連載 16」『警察公論』55(11).
- 田中茂正, 1991, 「全日本学校アルバム印刷組合による独占禁止法違反事件」『公正取引』(493) .
- 和田春樹, 2016, 「市民が戦争と闘った時代」10・8 山崎博昭プロジェクト 第 4 回東京講演会戦争に反対する講演と音楽の夕べ 2016 年 6 月 11 日文京区不忍通りふれあい館 (<http://yamazakiproject.com/events/2016/09/01/2990>)
- 読売新聞, 1941, 「神秘的な“V”の合言葉地球を一周——上海で英・米・独が奇妙な宣伝戦」1941 年 7 月 25 日夕刊 2 面.
- 読売新聞, 1942, 「チャーチル赤都で挨拶は指二本——第二戦線? V 字運動? さて何の謎やら ベルリンの物笑ひ 北仏の「真夏の夜の夢」」1942 年 8 月 22 日夕刊 2 面.
- 読売新聞, 1965, 「首相、V サインであいきょう」1965 年 6 月 13 日朝刊 2 面.
- 読売新聞, 1971, 「気の早い V サイン——たけなわ選挙の春」1971 年 3 月 30 日夕刊 3 面.
- 吉成正勝, 1976, 「特集・スクールアルバム制作シリーズ No. 1 総論編」『PhotoJapan』(6) .